

—八代きみ子の生活記録より—

家族のころ



16ミリ 白黒 32分

東京都教育映画コンクール金賞 文部省選定

◀解説

家族は、人間として一人ひとりがいわばちがう楽器でそれぞれの音色をもっているのだから、思い思いに鳴らしていればいいのだとおもう。親と子は年令も将来も異なるし、夫と妻は性も役割もちがう。ふだんは主張も当然ちがってくる。

しかし、ひとたび家庭に危機がおとずれたときは、家族のそれぞれの、持ち味の音色が一つのハーモニーを奏でるような、そんな家庭でありたい。そういう家庭であったら、平素はむしろのびのびと異った音色を出していた方がいい。

作者はそんな願望をもって、ささやかな一家の歴史を見つめてみた。

貧しいが、めいめいがひたむきに、しかも自由に生きてきた家族。そしてよくある一家の不幸にあい、団結して見事に危機を乗り越えた体験と、家族の歴史の一時期を書き綴った、福島県の一少女の作文が原作である。映画は原作に忠実に脚色・演出した。

株式会社 桜映画社

東京都新宿区西新宿1-22-1 スタンダードビル (342) 5768



◀ ストーリー

高橋ブリキ店の主人惣平は、朝になるのに帰って来ない。お人好しの彼は、ろくに知りもしない夫婦のけんかの仲裁を買って出て徹夜してしまったのだ。よねが迎えに行くと、夫婦げんかが納まったと祝杯をあげている最中。「女の出る幕じゃあねえ」と頭ごなしに追い返されてしまう。

娘の和子に、底ぬけの楽道家でお人好しでその上頑固な三大性格と評される惣平も、近頃体の調子がよくない。よく咳きこむ。一度医者にみてもらえとの家族の忠告にも、頑として耳をかさない。

よねと和子は、一計を案じて、和子の同級生の父の経営する内藤医院に頼んで、屋根の修理を口実に、惣平に診察を受けさせようとする。が、医師は急患で出かけてしまい、計画は失敗する。

長男の克己は、高校進学のことと、そんな父とやりあい、家を飛び出してしまう。

よねは、家のことを思って診察を受けようとしなかった惣平の心情を察して、仕事と一緒にについて行く。ブリキ屋の仕事を覚えようというのだ。

学校の帰り、あぶなっかしい足どりではしごを降りるよねの姿を見つけ、克己は思わず「母ちゃん」と叫んで駆け出して行く。

屋根の上、父の熱心な仕事ぶりに、克己は、今まで知らなかった父の一面を見たような思いだった。はじめて、親子3人の心が通い合う。

それから間もなく、惣平はひとりで医者を訪れた。案じていた通り、カゼでもゼンソクでもなく、結核との診断がおりた。

「だから医者へなんか行きたくなかったんだ」しょんぼりつぶやく惣平を励ますように、「保護なんか受け

ないでみんなで頑張ろうよ」「父ちゃんが入院しちゃうから淋しいけどこうやってみんなの気持ちが一つになれるんだもの、仕合せだよね」と家族4人の心は一つに寄り合った。克己も働きながら勉強するというし、よねも働こうという。

高橋ブリキ店は「当分休業」だが、残された3人の日常生活は明るい。よねは、惣平が夫婦げんかの仲裁を買って出た森川さんの紹介で、保険の勧誘をはじめ。夫と子ども達の暖い愛情に見守られ、大きなハンドバッグを下げて集金に出かけて行くよねの後姿も明るい。

■製作スタッフ

製 作	村 山 英 治
	大 西 雅 夫
脚 本	金 子 精 吾
	入選生活記録 八代きみ子作より
演 出	金 子 精 吾
撮 影	宮 脇 洋
照 明	浅 見 良 二
編 集	高 室 晃 三 郎
記 録	上 田 圭 子
助 監 督	倉 本 忍
進 行	山 崎 守 邦 夫
音 楽	浜 坂 福 夫

■出 演

桜 井 良 子	前 沢 迪 雄
斉 藤 英 雄	福 島 寿 美 子
市 毛 包 一	三 沢 康 子
菅 野 直 行	角 田 七 穂